

甜麵醬・芝麻醬の底力

味もスタイルも骨太
南イタリア料理専門店の魅力

南イタリアならではのワイン50本一挙公開



龍天門の広東焼味

安川哲二の今月一品／横田秀夫の今月のスイーツ／北京への道

気になる日本酒

運命の数字“十四”を冠した 人気酒『十四代』

ご縁あって、山形『十四代』（高木酒造）のお蔵にうかがうことができた。詳細は私がガイドを務める All About 日本酒・焼酎サイト (<http://allabout.co.jp/gourmet/sake/>) をご覧いただきたいのだが（PRで恐縮です）、飲食業界で実際に『十四代』をお取り扱いされている方も多いため、興味深い部分をピックアップしたい。

『十四代』という印象的な銘柄名。この命名には *shichu-jūshū* な噂が飛び交っているが、実のところはこうだ。酒造りのほかに県議会議員などの政治家としての仕事を持つ現在の十四代目ご当主高木辰五郎氏が、『十三代』『十四代』『十五代』『十六代』という名前を特許申請したところ、数字は認められないと申請却下になった。しかしなぜか『十四代』だけは申請が通った。「とよしろ、とか、とし

よ、とか誰かの名前だと思われたんでしようかねえ」と笑いながら教えてくださいましたが、まあ、これが運命というものなのだろう。

高齢の杜氏と交代に蔵に戻り、いわゆる『十四代』人気を生み出した十五代目高木顕統氏も「農大卒業後、流通業界の中にいて、『十四代』銘柄を客観視できた。この『十四代』という名前は非常にインパクトがあり、どこか人の心に残るような響きがあると感じていた。十三とか十五に勝るなにか……。その後、『十四代』で勝負したいと思うようになったんです」と語っている。

たしかに『十四代』という名前は響きがいいし語呂もいい。なんともいえないリズム感がある。もちろんそれを生かす文字も際立っているし、その文字を緑や紫のきらりと光る箔押しにしたのも「お酒の取り扱いに

気を使うお店は、たいてい冷暗所とか冷蔵庫のようなどころにお酒を置いてくれる。そういう場所にあつて、いかに目立たせるかってことを考えたらアレになった」となるほどと唸らせる理由がある。

『十四代』人気は、たしかに、十五代目が、蔵に戻る前の勤務先伊勢丹クイーンズシエフという流通業界の中にいてマーケティングを身につけたからという分析があたっていると思う。が、実際にそれに気がつくセンスと行動に起こす力があつてこそ。この感性があるからこそ、名前やボトルデザインだけでなく、なにより重要な基盤である『十四代』ならではの味わいを生み出すことが出来たのだろう。この十五代目、なによりセンスのよさを感じさせる人である。そこが日本酒界のイチローと呼ばれるゆえんかもしれない。

